

Figure 1. The effect of the number of trials on the number of correct responses. The number of correct responses was significantly higher than the number of incorrect responses in all cases. The number of correct responses was significantly higher than the number of incorrect responses in all cases.

2019年11月29日(金)

ヨコハマトリエンナーレ2020に向けて

横浜トリエンナーレは、3年に一度開催する現代アートの国際展として2001年にスタートし、まもなく20年の節目を迎えます。本展は国際的に活躍するアーティストの作品から新進のアーティストまで、広く国内外の最新の動向を紹介し、横浜から新しい価値観と新たな文化を継続的に世界へ向けて発信し、国際交流と相互理解に貢献することを目指してきました。

第7回展となるヨコハマトリエンナーレ2020「Afterglow—光の破片をつかまえる」では、インドのニューデリーを拠点とするアーティスト3名によるラクス・メディア・コレクティヴをアーティストック・ディレクターに迎え、彼らとともに時空を超える思考の旅へと誘います。

かつてアナログテレビがあった頃、放送終了後に流れた砂嵐の中には、ビッグバンの名残である宇宙マイクロ波背景放射と呼ばれる電磁波が含まれていたといえます。タイトルのAfterglow(残光)とは、私たちが日常生活の中で知らず知らずのうちに触れていた、宇宙誕生の瞬間に発せられた光の破片を指すものとして選ばれた言葉です。ラクス・メディア・コレクティヴは、太古の昔に発生した破壊のエネルギーが、新たな創造の糧となり、長い時間をかけてこの世界や生命を生み出してきたととらえ、現代の世界もまた、さまざまなレベルでの破壊／毒性と、回復／治癒の連続性の中で、人間の営みが行われてきたと考えています。目まぐるしく変化する世界の中で、有毒なものを排除するのではなく、共存する生き方をいかにして実現するのか。ラクス・メディア・コレクティヴと共に、アーティストや鑑賞者、そのほか様々な形で本展にかかわる人々の間でこの問いを共有し、思考を続けていくことによって「ヨコハマトリエンナーレ2020」は形作られていくことになります。

ヨコハマトリエンナーレ2020は、通常の展覧会だけでなく、2019年11月からスタートし、横浜にとどまらず広く海外でも開催する「エピソード」と呼ぶイベントの2部構成からなります。そこに、思考の出発点(ソース)を共有するための「ソースブック」と名付けた書物を加え、世界に対する認識を拡張していくを試みます。

2019年11月
横浜トリエンナーレ組織委員会

Afterglow—光の破片をつかまえる コンセプト

ヨコハマトリエンナーレ2020 アーティスティック・ディレクター
ラクス・メディア・コレクティヴ

ソースの共有

ホワイトノイズ

テレビがアナログだったころ、放送が終了すると私たちはテレビ画面の「^{ホワイトノイズ}砂嵐」にじっと見入っていたものだ。この砂嵐に迷いこむのは、不思議に心地よかった。このサイケデリックなミニマリズムの中では、ありとあらゆるものが見え、また想像することができた。その電子ノイズはつかの間の視覚的幻想みたいなもので、私たちはその中に模様を見つけたり、幽霊の姿を見たりしたものだ。本来の機能とは異なるその画面は、呪われた風景を眺める窓のようなものだった。

当時は知らなかったが、アナログテレビのまだら模様のホワイトノイズの中には、宇宙誕生のきっかけとなったビッグバンの名残である宇宙マイクロ波背景放射という電磁波が含まれていた。自分たちが眺めているのが、時間の始まりとともに放散されていたものだったなんて！ 爆発するたびに光の残余、すなわち光の名残が漏れる。とりわけ通信信号が消えゆくとき、その光は姿を現すのだ。

ルミナス・ケア

宇宙では常に爆発が起きている。太古の爆発は今も衝撃波を伝え、小爆発を繰り返し、爆発ごとに少しばかりの放射線が放出される。太陽の爆発は、ある種のサンゴから紫外線の毒性への反応を惹きだす。その光から身を守るために、サンゴは自ら発光するのだ。美しい光のパターンは輝きとなり、負担の大きい太陽の放射線から体組織をケアし、守るのである。

いつか、この生物発光という署名が未知の生命体を理解することにつながると考える宇宙生物学者も現れそうだ。その生命体は、巨大な太陽が発する激しい放射線に晒された太陽系外惑星に棲んでいる。地球の海に生息し、自らの発光で遠く離れた太陽と対話するサンゴのおかげで、私たちは別の太陽のある別の世界に棲む生命の本質について研究できるようになるのだ。

生命、宇宙、世界、そして日々の時間は、数えきれないほどの行為を通じて、分解・再構成され、発光に守られて (luminous care) 徐々に再建されていく。短い間の傷も、時間の有毒なかけらが放つ残光 (afterglow) の中で回復していく。生命とは発光する独学者 (luminous autodidact) なのである。

茂み

2007年6月のある昼下がり、西川紀光^{にしかわきみつ}——彼は67歳の放浪する不定期労働者、いわゆる「日雇い労働者」で、横浜寿町の木賃宿に身を寄せ、横浜湾の港湾労働者として生計を立てていた——曇り空を仰ぎながら、文化人類学者のトム・ギルと大きな声で笑っていた。彼はこう言った。

図にある宇宙卵はドゥルーズとガタリのアイディアです。

宇宙卵→誕生、だが未成熟→10年20年30年苦しんで修行すると第2の誕生！生まれてすぐ悟りが開ける人もいる。……私の場合は、まだ。……我々は宇宙の一部でありながら、宇宙を創設する……

プロレタリアの賢者にして造船所の哲学者である西川は、独学で得た莫大なソースを私たちに提供してくれる。それは同時に、横浜の街で生まれ、そこに根づく、大胆不敵な横断的意識から得たものでもある。

西川の遺産は、私たちにとっての「ソース」となる。「ソース」とは参照点であり、また隠喩と探求心にあふれる、行為・素材・痕跡の凝集体である。その「ソース」は、私たちに自問と考察のためのエネルギーを与えてくれる。また、身の回りにある文化的・知的素材を貪欲に漁り、指導者もなしに目覚めていくことで知識を身につけるためのエネルギーを。ソースは、さまざまな弧^{アーク}、ヴィジョン、ことばの間に非競合で平等の立場を設けられるように、またそれらの要素が互いに関わり、感染しあえるようにしてくれる。

ソースはほかのソースを呼び寄せる。そして、旅の、動作の、重点の移動の、小さな変化と大きな変調^{アイディネラリー}の旅程を作り上げる。今日の多軸的な世界にあって、これは自由な解釈の領域を開き、異なる傾向どうしの衝突を助長してくれる。トリエンナーレ制作中の長い熟考の過程の中で、ソースを

重層化し、アイティネラリーの厚みを増していくと、創造と発掘を推進する力が生み出されることがわかってきたのだ。

私たちは、遠く離れた場所にいる、あるいは近いところにいるヨコハマトリエンナーレ2020の観客やリスナー、および読者の方々に、一連のソースを提供する。これらは異なる時代、文化的背景や地理条件の場から引かれているが、どれも生きることを大切にしたい個人または集団が書いたものである。きらめきと白熱が集められてパッチワークが作られ、アーティストとその旅の同行者たちが旅立とうとする道のりを照らし出す。ソースは、私たちの対話を導き、活気づけ、インスピレーションを与え、謎をかける。その対話は、アーティスト、キュレーター、作家、そしてこの旅に興味をもつあらゆる人たちとかわされる。ソースとは、私たちに思考させ、火をつけ、学び、そして学びを捨てるような刺激を与える触媒なのである。

明滅する光

100年以上前、ホリプロバ・モリクという女性が、ある外国人とともに東ベンガル（現在の Bangladesh）の村を後にした。彼女が恋に落ちたその外国人は、武田和右衛門という旅する商人だった。彼女は彼とともに船出して、日本という新しい世界を驚きと喜びとともに発見する。日本語がほとんどわからないので、最初は沈黙が唯一のコミュニケーション手段だ。わざわざ世界を半周して一緒に過ごすことになった男の家族と友人との出会いは、彼女の記憶に深く刻まれた。私たちからすれば、彼らは、新しい世界の一員になろうと自ら学ぶひとりの女性に照らし出されているように見える。

私たちの友人であり、アーティストで哲学者のスヴェトラナ・ボイムは、「友情のセノグラフィ」という文章で、ある光について次のように書いている。

……極限の状況においては、光明は哲学的諸概念からではなく、男女が光をともし、与えられたわずかな時間を越えて輝く「不確かでちらちらとゆれる、多くは弱い光」から発するのだ……。「男女がその生まれの如何にかかわらず、互いの閃光を反映しあう」この光明の空間は、私たちが住む現れの世界に光を放つ人間らしさと友情からなる空間である。言い換えれば、友情とは、すべてを明瞭あるいは不明瞭にすることではなく、影と共謀し、戯れることなのである。その目的は啓蒙ではなく光輝であり、盲目的な真実を探求することではなく、不意に出会う明瞭さと誠実さを探求することである。

ホリプロバは、次のように書いている。

……ひとりひとりがそばに来て挨拶をする。若い人も年をとった人も皆、帽子を取って正座し、頭を深く下げてお辞儀をする……挨拶をかわす。ひとりひとりが名を名乗って挨拶し、こちらの体調を気遣い、感謝と喜びを表す言葉を口にする。何かを尋ね、答える度に3〜4回は頭を下げあうのがこちらの習慣である。私は日本語ができないので、黙ってただ頭を下げるばかりだ。……

見知らぬ人にどのように声をかけたらいいかわからなくても、自ら輝くことはできる。一日の労働を終えた体に光る汗からも輝きが放たれるように、あるいは自分の影を分かち合い、細長い空間で相手の影から自分の影が逃げていくときに映し出される光の輪郭のように。

知の形式は、翻訳不可能な経験とせめぎあうことから生まれる。

反百科事典

中世の時代には、南アジア・西アジア・中央アジアと中国・朝鮮・日本との間で、思想や絵、物語やものの考え方が、僧侶、異端思想家、商人、船乗り、巡礼者、逃亡者、奴隷といった旅する独学者たちによってやりとりされていた。

珍しい出来事、そのしるしとそれらを回避する方法の説明
象、発情期の象の死、象の状態と病気の説明
音楽、旋律、旋法、108のリズム、それぞれの長所と短所……の説明
神秘的な旅、瞑想、エクスタシー、奇跡、スーフィーから与えられた14軒の家……の説明

『ヌジューム・アル・ウルーム（諸科学の星々）』という16世紀に南インドのビージャール王国で編纂された占星術百科事典では、星を見つめることは友人をケアするときの治療薬となるとされている。そのテキストは、インド、アラビア、ペルシャ、トルコ、セムの生きた知識から派生した思想や実践を寄せ集めた内容となっている。

種まきと造園の説明、東風と東風が原因で発生するペストのための薬の説明
医術、病気、痛みの説明、簡便な治療薬と複合的治療薬、病気の原因……の説明
インドとホラーサーンのレスリング、技、流儀と礼儀の説明

南インドの夜空を照らすことばは、ヒンドゥー、ホラーサーン、ウィグル文化、トルキスタン、アラビア、古代ギリシャなどの地域の語彙から発される。ことばは、もとの文化圏から枝分かれし、交配する。移動に伴ってコンセプトを生み出しては、増殖する。呪文と処方箋はサンスクリット語、

トルコ語、テルグ語、フランク族のことは^{グロス}で註解されている。その註は必ずしも翻訳されているわけではないが、コンセプトをあらわす^{グロサラリア}異語で註解され、拡張していく。

火薬の説明と種類、火薬の作り方の説明
香水の作り方、方法論、種類と性質の説明

天文学の暦から書記システムに至るまで、私たちには世界が遠く離れた隅の方まで光を照らしているのが見える。そこで使われているのは、異なる成分を吸収する内在的ながらあまねく広がるエネルギーだ。とてつもなく遠くにあるものをつなげる行為には、膨大かつ永続的な意義がある。この驚くべきテキストの「目次」は、知り得たものと想像で書かれたものの間に内的・外的な境界をもたない宇宙の見取り図なのである。

夢の解釈の説明と真実と偽りの夢の説明

『ヌジューム・アル・ウルーム』があらわす森羅万象には、ほかのものと比べて、特に大きいものも近接するものもない。同時に、小さかったり遠くにあったりするものもない。ここでは行動どうしのきめの細かい網目のようなつながりが受け入れられている。創造的な活動のひとつひとつが、問いのひとつひとつが変化をもたらすソースとなりえ、その変化のひとつひとつが熟考を形作る瞬間をあらわしている。

詩の韻律、リズム、その他詩に関するいろいろなことの説明
寓話と伝奇の説明
商人と職人の技能の道具やわざの説明

実践のしかた、思考の形式、文化的・歴史的来歴のいかんによって意味のあるなしを規定するような既成のヒエラルキーは存在しない。自分の知っていることをシェアする人は、あるいは自分の知らないことに興味をもつ人はみな友だちになれるし、友だちをケアすることもできるのだ。

漁師のアドバイス

1945年8月に長崎に原子爆弾が投下されたとき、^{しもむらおさむ}下村脩は長崎郊外に住む16歳の少年だった。近くの諫早市で目撃したその目のくらむような閃光を彼は生涯忘れることはなく、そのとき一時的に目が見えなくなったとのちに語っている。彼はその後生命体のなかから光が発生するという

生物発光の研究の道に進み、生涯をかけて光と生命の関係性を追求することになる。最初は有機化学を専攻し、ウミホタルの研究にいそしんだ。

生物学者、海洋学者、漁師……のアドバイスの協力を求めることを勧める。

下村の研究でもっとも重要な発見はウミホタルの研究以降のこととなるが、その研究を支えたのは、1万匹のクラゲだった。彼はその1匹1匹を丁寧に観察したのだ。彼が漁師と友だちになることをさかんに勧めるのも、驚くには値しないだろう。

オワンクラゲから単離、精製することに成功して発見された蛍光タンパク質(GFP)は、その後実地に応用され、ある遺伝子が発現しているかどうかを容易に判別するレポーター遺伝子の通告により、水域の汚染状況と有毒物質の水準を測るために利用されるようになる。レポーター遺伝子に「^{トランスフェクト}移入」された生命体は「発現」し、有毒な物質の存在に反応して「発光」する。この技術は、それ自体では無害なので、バイオセンサーとなり、水界生態系の健全性を維持するための生体レポーターとして重要な手段となった。

分割

サンゴは紫外線の毒に対して発光し、オワンクラゲは毒性を感知するレポーター遺伝子を集めるために採取される。発光と有毒性の間にはつながりがある。

死んでいるなら毒性について考える必要はない。生きた細胞を成長させる条件は、その衰弱を惹き起こす環境とも切り離せない。私たちは、環境、内部要因、外部刺激など、成長をしのぐほどの、あるいは抑えるほどの衰弱を惹き起こすものを毒性と呼ぶ。それは毒であったり、汚染であったり、治療(矯正)であったり、廃棄物であったり、抑えがきかなくなるほどの成長であったりする。

毒物も、排除とヒエラルキーをシステム化する礎となる。インド半島の文明の毒物と生命の関係をめぐる深淵な非一思考を繰り返さぬよう学ぶことができる。それは何千年もの間続いてきたし、今でも続いているのだから。毒物が多勢の人にとってのお荷物になっている一方で、ごく少数の人はまったく汚染されぬままだ。排泄物や死骸から発生する臭いや毒素に汚染されないよう生物圏を清潔に保つという困難な仕事はかくして分離された。死を、感染症を、人間と動物のし尿を、生産物のかすを扱うことは、時間・権力・財をもつ人の仕事では、すっかりなくなってしまった。

闇の部分に分かち合うことはなくなってしまったのだ。

生命のケアと自己のケアは、毒とともにケアすることなしには成立しない。私たちは、自分たちの抱える病、屍肉、生産と消費のサイクルが出す残留物について考えなければならない。そのとき、運命という名に隠された残酷な労働区分をしてはならない。都市郊外に広がるゴミの山はどれも、現在が生み出した未来への需要を表している。だが、そんな未来には報われる保障もない。せいぜい考古学者たちがやって来るくらいだろう。ケアする光と毒のもつ闇の部分分割することは、この惑星の生命体の未来に対して害をなすのだ。

有毒な光

原子炉のメルトダウンが起こす不思議な現象に、経験はできるが目では見ることのできない光輝（glowing light）の知覚というものがある。チェレンコフ効果として知られるこの現象は、メルトダウンもしくは「臨界」時に荷電粒子が誘電体の内部をその物質内での光速よりも速く進むときに放射される光によって現れる。そもそも核物質から放射された光速より速いものが眼球の硝子体液を通過したときに現れる「蒼い光」は、眼球のなかの「経験」が脳に伝達されて知覚されるもので、視覚的現象として「見る」ものとは異なる。目が、目の外の、あるいは目の前の光を知覚していたとしても、人間が目にするという環境で起きたことではない。宇宙飛行士たちも太陽が宇宙で原子爆発する際に放射される太陽放射で同じような経験をすることがある。

その光は、美しいには違いないが、有毒な放射能のマーカーでもあり、ヴィジョンとして経験されるのだ。この亡霊のような光は、福島原子力発電所の事故の後にも経験されたといわれている。私たちの理解では、現代という時代のもつ毒性は、この亡霊のような光を育むことと出会わされなければならない。アーティストはこの光輝を、その美しさと危険性を感知しようとする。そのおかげで、私たちは常に身の回りで起きているあらゆるメルトダウンを見ることができ、これから生き抜くための——あるいは繁栄していくための方法を学べるようになるだろう。私たちは毒性と共存する生き方について考え始めなければならない。それを追放することは愚行だという自己認識に立たなければならないのだ。

翻訳不可能なことば—オントシラ

ベンガル語の「antashira（オントシラ）」ということばは、内在的な流れとあまねく広がる感覚を

表すときに使われる。この流れと感覚は、日々の暮らしの中に流れる知覚の層を作り出す。オントシラは、「気」のように、神経系のエネルギーの流れに似たものだ。「オントシラ」は、そのすべての広がりの中に生命を形づくる。今日、世界は、さまざまなオントシラの中から持続性とインスピレーションや力を引き出さなくてはならない。オントシラは、私たちの内在的であまねく広がる力であり、私たちすべての間を流れていく。その流れにつれて、私たちは、個々の生のマイクロコスモス(小宇宙)と、この惑星というつながりあった生命と、宇宙というマクロコスモス(大宇宙)の関係を作り直すのだ。

参考文献:

The Big Bang's Playing on TV
https://www.nasa.gov/vision/universe/starsgalaxies/cobe_background.html

Jack T. O'Malley-James and Lisa Kaltenegger, "Biofluorescent Worlds – II. Biological fluorescence induced by stellar UV Flares, a new temporal biosignature," *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society*, Volume 488, Issue 4 (October 2019), pp. 4530–4545.

Tom Gill, *Yokohama Street Life: The Precarious Career of a Japanese Day Laborer* [Asia World Series of Publications] (London: Lexington Books, 2015).
和文はトム・ギル『毎日あほうだんす——寿町の日雇い哲学者西川紀光の世界』(2013年、キョート出版)より抜粋。

Svetlana Boym, "Scenography of Friendship," *Cabinet*, Issue 36 "Friendship" (Winter 2009–2010)
Online article: <http://www.cabinetmagazine.org/issues/36/boym.php> (清水知子訳)

Hariprabha Takeda, *Bongomohilar Japan Jatra* (A Bengali Woman's Voyage to Japan), first published in Dhaka, 1915. Reprinted by Sahitya Prakash Publishers, Dhaka, 1999. English translation from Bengali by Debjani Sengupta, commissioned for Yokohama Triennale 2020.
ホリプロバ・タケダ「あるベンガル婦人の日本訪問記」『遡河』第10号(富井敬訳、1999年、遡河編集部)

Emma Flatt, "The Authorship and Significance of the Nujūm al-'ulūm: A Sixteenth-Century Astrological Encyclopedia from Bijapur," *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 131, No. 2 (April–June 2011), pp. 223–244. (帆足亜紀訳、矢野道雄 翻訳監修)

Osamu Shimomura, "Advice to Students Who are Interested in Studying the Chemistry of Bioluminescence," *Bioluminescence: Chemical Principles and Methods* (Singapore: World Scientific Publishing, 2006), pp. 375–378. (帆足亜紀訳)

Raqs Media Collective, "The Equal Division of Toxicity," *Livemint* (29 August, 2018)
Online article: <https://www.livemint.com/Leisure/JuxEvOeT9uy-hy5q75DRbl/Raqs-Media-Collective-dreams-of-an-equal-division-of-toxicity.html>

E.D. Clayton, *Anomalies of Nuclear Criticality*, Revision 6 (Washington: Pacific Northwest National Laboratory, 2010).

Shinzo Kimura, Toshihiro Takatsuji, Koji Uchiyama, Yukako Komasa, Akiko Kitamura, Hitoshi Sato, Michael Buzinny, "Current Situation and Challenges at Fukushima: Hands-on Measurements of Radiation Contamination after Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident," presented at the 20th IMEKO TC4 International Symposium and 18th International Workshop on ADC Modelling and Testing Research on Electric and Electronic Measurement for the Economic Upturn, At Benevento, Italy, September 15–17, 2014.
Online article: https://www.researchgate.net/publication/266140667_Current_Situation_and_Challenges_at_Fukushima_Hands-on_Measurements_of_Radiation_Contamination_after_Fukushima_Daiichi_Nuclear_Power_Plant_Accident

エピソードから始まる ヨコハマトリエンナーレ2020

私たちはときどき、トリエンナーレと次のトリエンナーレの間には1000日ほどあるという単純な事実を忘れてしまう。私たちはその時間のある部分を通路だと考えたい。そこで(世界じゅうの)たくさんの人々に、今回のトリエンナーレを作りあげるさまざまな力を、見つめ、精査し、興味をもってもらえるようにしたいのだ。対話を広げていければ、私たちは、言説と実践、調査と制作、少数派と多数派、隠蔽と公開の間にある強固な区分をほぐしていけるだろう。この対話は、美術作品とそれをめぐることばが、期待され、受け止められ、伝わっていく過程にしたがって進めていかなければならない。

私たちは、「エピソード (Episodo)」(日本語を英語表記にしたもの)という短期間のイベントを断続的に行い、こうした対話のきっかけを作りたいと考えている。「エピソード」ということばは、ある時点の出来事に注目したとき何が起きるかを考えるために選ばれている。たとえば、気温が突然変化するのに立ち会ったらどうなるのか？ 明るすぎる空を見上げて日食を観察しようとするとうどうなるのか？あるいは、本来関係のない器械の間に予期せぬ同期が起こるとどうなるのか？

「エピソード」は、以下のようなものの間に網を張っていく。次々に行われる集団での作品制作、素材をめぐる静かな内省と思索、遠くない未来に向けての組織づくり、音の世界の探究、インフラと廃棄物を隠す硬いうわべについての研究、スポーツにおける息をのむ美技をめぐる好奇心……。そうして「間の時間」、次の1000日への時間を刻んでいくのだ。

「エピソード」に招かれているのは、アーティストやキュレーター、映像制作者、ダンサー、ミュージシャン、パフォーマー、わけても未来学者だ。彼らは打ち解けた集まりの中で実験を行う。そこでは自然発生的に歴史的証言が行われ、はっきりしない話があえて語られ、思想の旅程が推敲され、異なる時代のエコロジック・歴史的調査に誰もが耳を傾けるだろう。

ヨコハマトリエンナーレ2020の展示はサイトスペシフィックであり、タイムスペシフィックだが、その一方で、「エピソード」は「エピソード」ならではのやり方で、横浜をばらばらで一時的な場からなる別々のコミュニティ群との対話に巻き込んでいく。

「エピソード」は、2019年11月に横浜で行われる「エピソード00 ソースの共有」から開始される。イベントは、香港、ニューデリー、ヨハネスブルグに移動し、「ディスカーシヴ・ジャスティス」(とりとめのない正義)に関する対話を始め、2020年7月に開幕するトリエンナーレの期間中、横浜で本格的に展開される予定である。

[須川善行記]

ラクス・メディア・コレクティブ Raqs Media Collective

[1992年、インド(ニューデリー)にて結成]



Photo: TANAKA Yuichiro

ラクス・メディア・コレクティブ(以下、ラクス)は、ジーベシュ・バグチ(Jeebesh Bagchi 1965年)、モニカ・ナルラ(Monica Narula 1969年)、シュッダブラタ・セングプタ(Shuddhabrata Sengupta 1968年)のニューデリー生まれの3名により結成されたアーティスト集団です。

彼らは、ニューデリーにあるジャミア・ミリア・イスラミア大学のマス・コミュニケーション修士課程の同窓生です。2001年にインド有数の人文系シンクタンク「国立発展途上社会研究センター(Centre for the Study of Developing Societies)」の外郭団体「サライ・プログラム」の創設に携わり、約10年にわたり都市空間や文化の変容について研究を重ね、また、同プログラムの発行物『サライ・リーダー』を編集するなど、インドの現代文化を刺激し続けています。

「Raqs」とは、ペルシャ語、アラビア語、ウルドゥー語で、回転運動や旋回舞踊によって到達するある種の覚醒状態や、立ち現れてくる存在との一体感を表す言葉です。

ラクスは、こうした状態を思想的な運動と捉え、世界や時間の概念を絶え間なく問い、精力的に思索し続ける「動的熟考 / kinetic contemplation (ラクスによる造語)」を活動の核としています。

彼らの実践は、アート作品の制作、展覧会のキュレーション(企画)、パフォーマンスのプロデュース、執筆など多岐に渡り、表現形式もメディアも多様です。また、建築家、コンピュータ・プログラマー、ライター、キュレーター、舞台演出家ら専門家や市民とのコラボレーションも豊富で、多面的な作品やプロジェクトを多数実現しています。

探究心旺盛なラクスは、多様な人々と未知なるものの豊かさを共有し、会話をつないで開かれた議論を促す独創的な手法やアプローチによって、現代美術、哲学的思索、歴史的考察が交差する領域で独自性を発揮し、予期せぬ新たな視点を提起します。

【キュレーターとして企画した展覧会】

「In the Open or in Stealth—The Unruly Presence of an Intimate Future」(バルセロナ現代美術館 [MACBA]、スペイン・バルセロナ、2018–19年)

第11回上海ビエンナーレ「Why Not Ask Again: Arguments, Counter-arguments, and Stories」(2016–17年)

マニフェスタ7「The Rest of Now」(イタリア・ボルツァーノ、2008年)

【個展】

「Raqs Media Collective: Not Yet At Ease」(ファーストサイト、英国・コルチェスター、2018–19年)

「Raqs Media Collective」(ノルトライン=ヴェストファーレン州立美術館 K21、ドイツ・デュッセルドルフ、2018年)

「Raqs Media Collective: Twilight Language」(ザ・ホイットワース、英国・マンチェスター、2017–18年)

【海外で参加した国際展】

シャルジャ(第11回、2013年/第13回、2017年)、ヴェネチア(第50回、2003年/第51回、2005年/第56回、2015年)、サンパウロ(第29回、2010年)、上海(第8回、2010–11年)、イスタンブール(第10回、2007年)、シドニー(第15回、2006年)、台北(2004–05年)、ドクメンタ11(2002年)

【日本で参加した国際展・展覧会】

瀬戸内国際芸術祭(香川県、2019年)、奥能登国際芸術祭(石川県珠洲市、2017年)

参加アーティスト



Photo by Anton Orlov

新井 卓

ARAI Takashi

1978年神奈川県生まれ、同地を拠点に活動。写真の最初期の技法であるダゲレオタイプを用い、核の歴史への関心と接続させた作品などを発表。2016年木村伊兵衛写真賞、2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。2016年「Japanese Photography from Postwar to Now」展(サンフランシスコ近代美術館)、上海ビエンナーレ出品。



《B29:エノラ・ゲイの多焦点モニュメント、マケット》

2016

© Takashi Arai, Courtesy of PGI



Photo by Aude Wyart

イシャム・ベラダ

Hicham BERRADA

1986年カサブランカ(モロッコ)生まれ、ルーベを拠点に活動。

鉱物が化学反応を起こす過程や、その結果生まれる現象を、彫刻、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどによって視覚イメージとして提示している。2019年ルーブル・ランス美術館、ハイワード・ギャラリー(ロンドン)にて個展開催。



《Présage(予兆)》(スティル)

2007- Ongoing

© ADAGP Hicham Berrada. Courtesy the artist and kamel mennour, Paris/London,
Photo by Hicham Berrada



Photo by Annabel Elston

ジェシー・ダーリング

Jesse DARLING

1981年オックスフォード(イギリス)生まれ、ロンドンとベルリンを拠点に活動。

近代性という神話や、社会や物質的な世界の構造に縛られる身体への関心を軸に、彫刻、インスタレーション、ドローイング、テキスト、パフォーマンスなど、多彩な手法で制作を行う。2018年テート・ブリテン(ロンドン)で個展開催。2019年ヴェネチア・ビエンナーレ出品。



《Untitled》(waiting room poster/municipal hospital series)

2017

Courtesy of Jesse Darling



Photo by Migue Barreto, TEA Tenerife Espacio de las Artes

エヴァ・ファブレガス

Eva FÀBREGAS

1988年バルセロナ(スペイン)生まれ、ロンドンを拠点に活動。

大型のソフト・スカルプチャーや鑑賞者の身体を包み込むようなインスタレーションを通して、人間の身体や欲望、愛着が、産業デザインからどのような影響を受けるのかを探究している。2017年ミロ美術館(バルセロナ)、2019年セントロセントロ(マドリード)、クンストフェライン・ミュンヘンにて個展開催。



《Pumping》

2019



ファームング・アーキテクト

Farming Architects

2017年にズン・アン・ヴィエットとニャン・アン・タンが設立。ハノイ(ベトナム)を拠点に活動。自然や地理、気候、人間に注目し、「都市に緑の種をまく農家のような建築」を活動のコンセプトとしている。持続可能で環境にやさしい住居やカフェ、図書館などの建築設計、内装デザインを手がける。ハノイのKOIカフェは、世界的な建築情報サイト ArchDailyの「Building of the Year 2018 Hospitality Architecture」に、またVAC図書館は『TIME』誌による「World Greatest Places 2019」に選出された。



《Architecture is a miracle universe》
2019

Courtesy of Farming Architects, Photo by Farming Architects



Photo by Maja Bosnic

イヴァナ・フランケ

Ivana FRANKE

1973年ザグレブ(クロアチア)生まれ、ベルリンを拠点に活動。光と人間の知覚に関する研究を通じて、人間の知覚の限界値に注目しながら、鑑賞者の認識と周囲の環境を有機的につなぐ境界面となるようなインスタレーションを制作している。2007年ヴェネチア・ビエンナーレ、クロアチア館代表。2016年上海ビエンナーレ出品。2017年ザグレブ現代美術館にて個展開催。



《In the Faraway Past and in the Future》
2014

© Ivana Franke, Courtesy of INSERT2014,
Photo by Umang Bhattacharyya



Photo by Ewa Szatybelko

ズザ・ゴリンスカ

Zuza GOLIŃSKA

1990年グダンスク（ポーランド）生まれ、ワルシャワとロンドンを拠点に活動。インスタレーションやサイト・スペシフィックなプロジェクトを通して、社会構造や空間にまつわる考察を行う。2018年デルフィナ・ファンデーション「ArteVue ArtePrize 2017」受賞。同年、ワルシャワ近代美術館にて個展開催。



《Run-up》
2015

Photo by Marcel Kaczmarek



Photo by Theo Bitzer

アンドレアス・グライナー

Andreas GREINER

1979年アーヘン（ドイツ）生まれ、ベルリンを拠点に活動。医学、解剖学、彫刻を学ぶ。生物、自然のプロセス、デジタル・アートを作品に取り入れ、自然科学、人文科学、文化における人と自然との関係、またその影響を探究している。2016年ベルリニッシュ・ギャラリー（ベルリン）、2019年メンヒェハウス美術館（ゴスラー）にて個展開催。



《The Molecular Ordering of Computational Plants》
Installation view as part of the exhibition “Hybrid Matter,” black light LED strips turned on by timer, algae in photosynthesis state, Dittrich & Schlechtriem
2018

© Andreas Greiner, Tyler Friedman, Courtesy of Dittrich & Schlechtriem Gallery,
Photo by Jens Ziehe



Photo by Reha Arcan

ニルバー・ギュレシ

Nilbar GÜREŞ

1977年イスタンブール(トルコ)生まれ、ウィーンとイスタンブールを拠点に活動。パフォーマンス、映像、彫刻、インスタレーション、布とミクストメディアのコラージュなど、さまざまな手法で作品を発表している。社会的な不平等やジェンダーの役割、文化的アイデンティティを示す記号などへの関心を、詩的でユーモラスな表現に転換する。2014年サンパウロ・ビエンナーレ、2016年シドニー・ビエンナーレ出品。



《Pommel Horse from the Series Unknown Sports》(部分)
2009

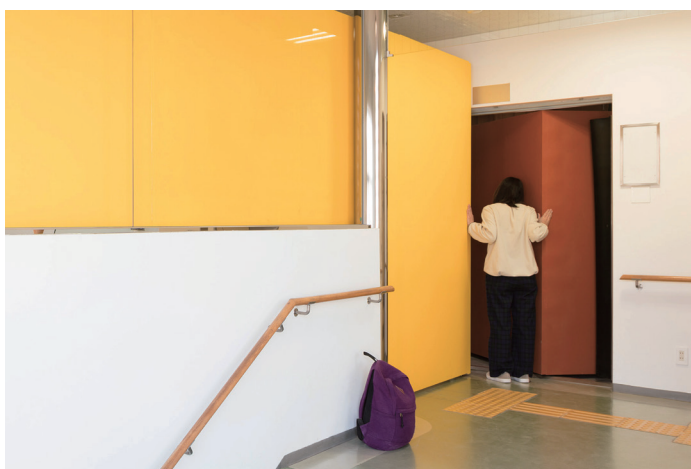
© Nilbar Güreş, Courtesy of Galerist



飯川 雄大

Iikawa Takehiro

1981年兵庫県生まれ、同地を拠点に活動。人の認識の不確かさや、社会の中で見逃されがちな事象に注目し、鑑賞者の気づきや能動的な反応を促すような映像、写真、インスタレーションを制作。2015年黄金町エリアマネジメントセンターにて個展開催。2019年「六本木クロッシング2019展:つないでみる」(森美術館)出品。また、2005年横浜トリエンナーレにアーティスト・コレクティヴCOUMAとして参加。



「デコレータークラブ 配置・調整・周遊」展示風景
2018

© Takehiro Iikawa, Courtesy of あまらぶアートラボ A-Lab,
Photo by Mugyuda Hyogo



Photo by Shingo Kanagawa

飯山 由貴

IIYAMA Yuki

1988年神奈川県生まれ、東京都を拠点に活動。個人の生活や経験、記憶をインタビューや記録物などを通してたどり、歴史や社会といった大きな文脈との関係性を見つめるインスタレーションを発表。2015年、愛知県美術館にて個展開催。2016年「歴史する！Doing history!」（福岡市美術館）、2017年「コンニチハ技術トシテノ美術」（せんだいメディアテーク）出品。



《海の観音さまに会いに行く》(スタイル)
2014

© Yuki Iiyama,
Photo by Hibiki Miyazawa



岩間 朝子

IWAMA Asako

東京都生まれ、同地とベルリンを拠点に活動。自然と人間のつながりや在り方、「食ること」、「滋養」とは何かを問いながら制作を続ける。2005年より約10年間、スタジオ・オラファー・エリアソンに併設された食堂「The Kitchen」の立ち上げ、運営に料理人として携わり、2013年には書籍『スタジオ・オラファー・エリアソン キッチン』を共同制作（2018年に美術出版社より出版）。2016–2017年「フードスケープ 私たちは食べものでできている」（アーツ前橋）に参加。



《non-visible》(スタイル)
2013

© Asako Iwama and Derrick Wang



川久保 ジョイ

KAWAKUBO Yoi

1979年トレド(スペイン)生まれ、ロンドンと東京都を拠点に活動。

心身障害学を学び、金融トレーダーとしての経歴を持つ。写真や映像、多言語によるテキスト、インスタレーションなど多様なメディアで、人や土地のアイデンティティ、経済活動などに着想を得た社会批評的な作品を発表。2016年資生堂ギャラリーにて個展開催。2017年横浜トリエンナーレ出品。



「200万年の孤独、さくらと50万光年あまり」展示風景
2017

Courtesy of 特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター,
Photo by Yasuyuki Kasagi



Photo by Yogesh Barwe

アモル・K・パティル

Amol K. PATIL

1987年ムンバイ(インド)生まれ、同地を拠点に活動。

コンセプチュアル・アーティスト、パフォーマンス・アーティストとして活動。都市環境や労働者階級の生活をテーマにビデオ、キネティック・スカルプチャー、インスタレーションなど多様な手法で作品を発表。2015年、アムステルダム市立美術館のグローバル・コラボレーション・プログラム「カマラド」参加。2017年韓国国立アジア文化殿堂(光州)にて個展開催。2018年「Reimagine India」展(ザ・ショウルーム、ロンドン)出品。



《What is human becomes animal》
2019

© Amol K. Patil, Courtesy of Amol K. Patil,
Photo by Amol K. Patil



Courtesy of Estate of Masaharu Sato and KEN NAKAHASHI

佐藤 雅晴

SATO Masaharu

1973年–2019年。

ビデオカメラで撮影した日常の風景を、パソコン上でトレースしてアニメーション化するロトスコープと呼ばれる技法により、リアルなイメージの中にも、どこか奇妙な感覚をもたらす映像作品を発表したことで知られる。本展では、実写をなぞるロトスコープと同様の手法で制作され、遺作となった絵画群を紹介する。2016年原美術館にて個展開催。2019年「六本木クロッシング 2019展:つないでみる」(森美術館)出品。



《ガイコツ》

2018

© Estate of Masaharu Sato,
Courtesy of KEN NAKAHASHI



新宅 加奈子

SHINTAKU Kanako

1994年大分県生まれ、京都府を拠点に活動。「生きていることを確認するための行為」として自らの裸体に絵の具を纏う姿を、写真やパフォーマンスで発表している。2019年、京都造形芸術大学大学院総合造形領域修了。同年、アートアワードトーキョー丸の内2019丸の内賞(オーディエンス賞)受賞。



《I'm still alive》

2019



田村 友一郎

TAMURA Yuichiro

1977年富山県生まれ、京都府を拠点に活動。既存のイメージやオブジェクトを起点にしたインスタレーションやパフォーマンスを手掛ける。土地固有の歴史的テーマから身近な大衆的テーマまで着想源は幅広く、現実と虚構を交差させつつ多層的な物語を構築する。2016年「BODY/PLAY/POLITICS」(横浜美術館)、2019年アジア・アート・ビエンナーレ(台中)出品。



《深沼》パフォーマンス風景
2013



Anton Vidokle at NASA Space Center, Houston, 2018
Photo by Toby Kamps

アントン・ヴィドクル

Anton VIDOKLE

1965年モスクワ(旧ソヴィエト連邦、現ロシア)生まれ、ニューヨークとベルリンを拠点に活動。

国際的に活躍するアーティストであるだけでなく、『e-flux journal』の編集者としても知られる。近年の代表作に《ロシア宇宙主義》三部作(2014-2017年)がある。2012年ドクメンタ(カッセル)、2015年ヴェネチア・ビエンナーレ出品。



《Citizens of the Cosmos》
Anton Vidokle, still from HD video, color, sound. 30:14 minutes.
Japanese with English subtitles
2019
Courtesy of the artist



ランティアン・シェ

Lantian XIE

1988年生まれ、ドバイ（アラブ首長国連邦）を拠点に活動。

イメージ、もの、物語、ジャズバンド、オートバイ、本、パーティなどを制作、主宰する。2016年コチ=ムジリス・ビエンナーレ、2017年ヴェネチア・ビエンナーレ、2019年シャルジャ・ビエンナーレ出品。



《A rumble interrupted our chat》（部分）
Jazz band plays in the lobby of a hotel as part of a series of meetings,
fictions, objects, and things that happen across a city.

2017

Courtesy of the artist and Grey Noise, Dubai

ヨコハマトリエンナーレ2020 開催概要

タイトル ヨコハマトリエンナーレ2020「Afterglow—光の破片をつかまえる」
Yokohama Triennale 2020 “Afterglow”

展覧会会期 2020年7月3日(金) — 10月11日(日)
※開場日数90日、毎週木曜日休場(7/23、8/13、10/8を除く)

会場 横浜美術館 横浜市西区みなとみらい3-4-1
プロット48 横浜市西区みなとみらい4-3-1(みなとみらい2 1中央地区48街区)

主催 横浜市、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、
横浜トリエンナーレ組織委員会

アーティスティック・ ディレクター ラクス・メディア・コレクティヴ

会場案内図



※事業名の総称及び組織名は「横浜トリエンナーレ」(横浜=漢字表記)、第7回展の事業名は「ヨコハマトリエンナーレ2020」(ヨコハマ=カタカナ表記)となります。

ヨコハマトリエンナーレ2020 実施体制

アーティスティック・ディレクター

ラクス・メディア・コレクティヴ

横浜トリエンナーレ組織委員会

名誉会長 林 文子（横浜市長）[代表]
上田良一（NHK会長）
渡辺雅隆（朝日新聞社代表取締役社長）
委員 近藤誠一（〔公財〕横浜市芸術文化振興財団理事長）[委員長]
逢坂恵理子（横浜美術館館長）[副委員長]
池戸淳子（横浜市文化観光局長）
梶健一郎（NHK事業センター専任部長）
澤 和樹（東京藝術大学学長）
高階秀爾（大原美術館館長）
建畠 哲（多摩美術大学学長）
柄 博子（〔独法〕国際交流基金理事）
堀越礼子（朝日新聞社執行役員 企画事業担当兼企画事業本部長）

事務局

開催本部長 松元公良**
事務局長 五十嵐誠一*
事務局次長 秋山大介（NHK）、八巻直史（朝日新聞社）

プロジェクト・マネージャー／事務局次長 帆足亜紀*
管理運営マネージャー／事務局次長 梶原 敦**
コミュニケーション・マネージャー 西山有子

-キュレトリアル・チーム

展示統括／キュレーター 内山淳子*
企画統括／キュレーター 木村絵理子*
コーディネーション統括／レジストラ 鈴木祐子
アシスタント・キュレーター 日比野民蓉*
キュレトリアル・コーディネーター 倉茂なつ子
アシスタント・プロジェクト・マネージャー 福岡綾子*
プロジェクト・コーディネーター 鈴木慶子

-アドミニストレーション・チーム

総務担当 赤崎由香**、山田卓広**、小山内幸恵*、土田香織*
運営担当 小川 哲**、鶴見天平**
広報・プロモーション担当 津金澤恭之**、高橋伸佳*、岩田朋子
連携・社会包摂担当 高田 聡**、平林乙彦**
*横浜美術館（〔公財〕横浜市芸術文化振興財団）所属 **横浜市所属

デザイナー

アリアナ・スパニエ

空間構成

MMA inc. 工藤桃子

ラクス・メディア・コレクティヴ・リサーチ・アシスタント

カウシャル・アジェイ・サブレイ

開催実績

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
開催年	2001年	2005年	2008年	2011年	2014年	2017年
会期 (開場日数)	9月2日 - 11月11日 (67日)	9月28日 - 12月18日 (82日)	9月13日 - 11月30日 (79日)	8月6日 - 11月6日 (83日)	8月1日 - 11月3日 (89日)	8月4日 - 11月5日 (88日)
主会場 (有料)	[2会場] ・ パシフィコ横浜 展示ホール ・ 横浜赤レンガ倉庫 1号館	[1会場] ・ 山下ふ頭3号・4号上屋	[4会場] ・ 新港ピア ・ 日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK) ・ 横浜赤レンガ倉庫 1号館 ・ 三溪園	[2会場] ・ 横浜美術館 ・ 日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)	[2会場] ・ 横浜美術館 ・ 新港ピア	[3会場] ・ 横浜美術館 ・ 横浜赤レンガ倉庫 1号館 ・ 横浜市開港記念会館 地下
テーマ	メガ・ウェイブ ー新たな総合に向けて	アートサーカス [日常からの跳躍]	TIME CREVASSE ータイムクレヴァスー	OUR MAGIC HOUR ー世界はどこまで知ること ができるか?ー	華氏451の芸術: 世界の中心には 忘却の海がある	島と星座とガラパゴス
ディレクター ／キュレーター	アーティストック・ ディレクター: 河本信治 建昌 哲 中村信夫 南條史生	総合ディレクター: 川俣 正 [キュレーター] 天野太郎 芹沢高志 山野真悟	総合ディレクター: 水沢 勉 [キュレーター] ダニエル・バーンバウム フー・ファン 三宅暁子 ハンス・ウルリッヒ・オプリ スト ペアトリクス・ルフ	総合ディレクター: 逢坂恵理子 アーティストック・ ディレクター: 三木あき子	アーティストック・ ディレクター: 森村泰昌 [アソシエイト] 天野太郎 大館奈津子 柏木智雄 神谷幸江 林 寿美	コ・ディレクター: 逢坂恵理子 三木あき子 柏木智雄
作家数	109作家	86作家	72作家	77組 79名	65組 79名	38組 1プロジェクト
作品数	113件	84件	66件	337件	444件	344件
総事業費	約7億円	約9億円	約9億円	約9億円	約9億円	約9億円
総来場者数	約35万人	約19万人	約55万人	約33万人	約21万人	約26万人
外国人 来場者数	—	—	—	約3,000人	4,501人	7,059人
中学生以下 来場者数	—	—	—	24,205人	26,381人	26,988人
有料会場 来場者数	約35万人 ※ ※チケットは2日間有効 (連続しない日も可) ※未就学児無料	約16万人 ※チケットは1日に限り有効 ※フリーパスあり ※中学生以下無料	約31万人 ※ ※チケットは2日間有効 (連続しない日も可) ※中学生以下無料	約30万人 ※ ※チケットは1会場1日有効 ※中学生以下無料	約21万人 ※ ※チケットは1会場1日有効 ※中学生以下無料	約25万人 ※ ※チケットは1会場1日有効 ※中学生以下無料
チケット 販売枚数	約17万枚	約12万枚	約9万枚	約17万枚	約10万枚	約10万枚
メディア 露出件数	237社以上 (うち海外36社以上) ※掲載件数は記録なし	1,089件 (うち海外40件)	1,233件 (うち海外165件)	1,763件 (うち海外139件)	3,899件 (うち海外117件)	6,923件 (うち海外314件)
ボランティア 登録者数	719人	1,222人	1,510人	940人	1,631人	1,474人

※ 第1回、第3回、第4回、第5回、第6回については、有料会場の延べ入場者数

横浜トリエンナーレの基本的な考え方

使命	横浜トリエンナーレは、我が国を代表する現代アートの国際展として、文化芸術創造都市・横浜の発展をリードするとともに、多様性を受け入れる心豊かな社会の形成に寄与します。
目標	アートでひらく ひらかれた現代アートの祭典として、誰もが多様な表現に触れる機会を分野と時代を横断して提供し、世代等を超えた理解を促進します。 世界とつながる ナショナルプロジェクトとして、横浜から新しい価値観と新たな文化を継続的に世界に届け、国際交流と相互理解に貢献します。 まちにひろがる 文化芸術創造都市として築いている、横浜ならではのまちの力と一体的に推進します。
行動方針	世界水準 次世代育成 社会包摂 市民参加 祝祭性 賑わいづくりと経済活性化

《本プレス資料に関するお問い合わせ》

ヨコハマトリエンナーレ2020広報事務局(株式会社ブラップジャパン)

担当：横澤、本郷、増田

〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F

TEL：03-4580-9110

E-MAIL：yokotori2020pr@prap.co.jp

《横浜トリエンナーレ組織委員会に関するお問い合わせ》

横浜トリエンナーレ組織委員会事務局 広報担当：高橋

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内

TEL: 045-663-7232(平日10:00～18:00) FAX: 045-681-7606

E-MAIL：press@yokohamatriennale.jp